2019『白山麓鳥越城の観想』　補足および訂正

(38 頁 5 行目の文末から)　土橋の構築は掘切を越えるのを容易とするのは表層的な理解である。本丸の横堀掘削で館城縄張が見えたように、空堀を渡る土橋構築は虎口における防衛の要と位置付けているのだ。二の丸・三の丸等での土橋構築は曲輪毎の単独虎口としてだけではなく複数の館城が連携して防衛するもののようだ。単純な虎口なので侵略側において定まる目標となるが、狭められた土橋を渡る見通しの効く構造は少人数での防御が行える縄張である。攻撃側 1 人に対し、3 人、それ以上の人員での対決かと思える。その設えの為に、各曲輪内の礎石等を搬出して罠としての幅の狭い虎口を構築したのだ。だが、攻撃側の武器が刀や手槍等であれば防衛側に効果はあるだろうが、飛び道具を用いる戦国後半では如何だろうか。直線的な平入は弱点とも思える。ともあれ、空堀を渡る土橋の設定は二曲城跡二の曲輪・三の曲輪でも構築されているように一揆勢の城郭縄張の定形なのだ。

(40 頁 27 行目から)　今一度、構と城との字面を眺めて観る。「吉岡ノ構」と「さら之城」と並置すると、漢字・平仮名・片仮名まじりで名称の印象を操作しているように見えてくる。対称的な表記なのだ。音読するならば、その差異は際だってくる。「吉岡」との漢字の地名は角張る重い印象で、「城」(しろ・じょう)と続けるよりは「構」(かまえ)と続く方が、音としてもおさまりが良い。加えて、平仮名でなく片仮名の「ノ」で「構」につなぐのも字面としても順当である。一方の「さら之城」は、「佐良」との漢字ではなく平仮名として「城(しろ)」につなげるのは、地名の滑らかで優しい響きに調和した音列と感じられる。城郭として調和させるには「城」(しろ)との表記を選択しなければならないのだ。「構」では統一感が崩れる。当然ながら、「さら城」であってはならない。対称的にしなくてはならない。間をつなぐのは、見た目で棒状の「ノ」であってはならず、また、平仮名の「の」を重ねるとアクセントが後ろに移動するので、「之」とするのが必然である。

「吉岡ノ構・さら之城」との表記は、地名の響きから着想され、対称的に表記した安井久右衛門の創作と捉えるならば、その実態は、現地においては雲散霧消を免れない。

42 頁　本文 8 行目(図 1-12)を、(図 1-11)に訂正

140 頁　本文 7 行目にある　(図 4-17 参照)削除、(新東晃一 2006 34p 参照)に訂正

2019　9　　西野秀和